

海龍王寺旧境内の調査

— 第525次

1 はじめに

本調査は、海龍王寺写経道場建設にともなう発掘調査である。調査区は、海龍王寺境内西側、海龍王寺西金堂から西北へ約4.3mの地点に位置する。なお調査区の周辺は、長く民有地となっていたが、昭和以降の換地によりふたたび寺地に復した。調査区の規模は、東西10m、南北3m、調査期間は2014年2月19日から2014年2月28日までである。なお、後述のとおり西回廊の一部と考えられる遺構を検出した。協議の結果、写経道場を当初計画位置より西側へ移して建設する計画変更がおこなわれた。それにともない、調査区も西側へ2m拡張して調査をおこなうとともに、回廊に関わる遺構の保存が図られた。海龍王寺をはじめ関係各位に謝意を表す。

2 海龍王寺の沿革と既往の調査

海龍王寺の沿革 海龍王寺は、『続日本紀』や「正倉院文書」などに「隅院」や「隅寺」などの名で呼ばれており、海龍王寺の呼称は中世以降とされる。創建については詳らかではないが、「正倉院文書」にある写経関係の文書から、天平8年(736)にはすでに存在していたらしい。寺地は、左京一条十三・十四坪と一条三坊三・四坪におよぶ。平安時代には興福寺の管領であったが、12世紀にはかなり衰微していたようである。

ところが鎌倉時代になると、寛元元年(1243)に承久の乱で没収された河内国八尾の水田を還付する願いを出し、翌年には金堂・講堂・東西両金堂・僧房の修造を願い出ている。ここで注意されるのは、回廊の文字がみえない点であり、そこを勘案すると13世紀前半までに回廊は失われていたと考えるのが妥当であろう。そして、西大寺復興で名を知られる叡尊が、嘉禎2年(1236)から暦仁元年(1238)まで海龍王寺に住し、その後正応元年(1284)に西金堂の大修造や経蔵の造営、堂宇の復興に注力したことも注意される。

しかし、その後室町時代に寺勢は衰え、江戸時代には一層衰微したが、それでも寛文6年(1666)には本堂の再建など伽藍の修造はおこなわれていた。ただし、この

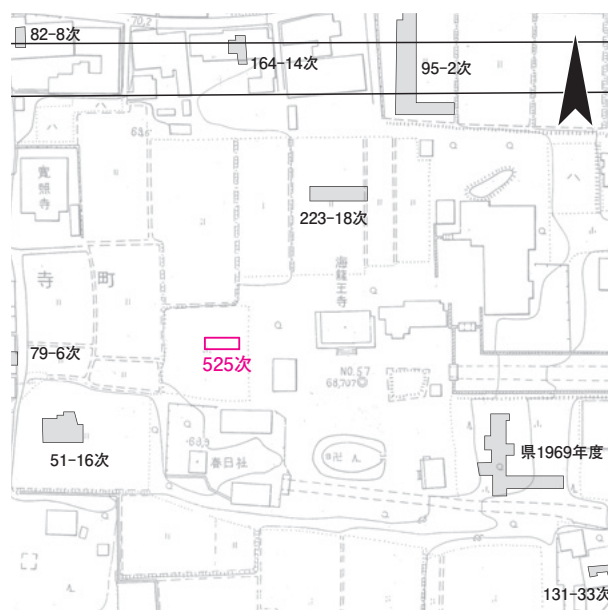


図257 第525次調査区位置図 1:2000

時点で講堂・食堂・西室・楼門などは失われていた。

既往の調査 1969年12月、経蔵の東隣接地で実施した発掘調査では、海龍王寺創建期と推定される南北棟の掘立柱建物等を検出した(『年報 1970』)。つづく1970年7月海龍王寺旧境内の防災工事に際し、東門から中門、庫裏や客殿周辺での消火栓導水管埋設にともなう立会調査がおこなわれ、東・南面回廊の一部を検出した(『年報 1971』)。この際に確認された東回廊基壇の羽目石は、高さ77cm、幅47cm、厚さ9cmを測る。1991年12月に伽藍の北方で実施した第223-18次調査では、金堂から北へ約30m付近の地に、食堂と推定される東西長が15m以上を測る東西棟の基壇建物を検出した(『1991年度 平城概報』)。

このほか、1965~66年に実施した西金堂の修理工事に際して、西金堂の構造は無論、中金堂や西面回廊基壇の構造についても知見が得られている¹⁾。

3 基本層序

基本層序は、上から順に表土層(厚さ15cm)、旧耕土(15cm)、整地土1(10cm)、整地土2(40cm)と2層の整地土が展開し、さらに黄橙粘質土(地山)と続く。整地土1の上面は標高68.4m、整地土2では標高68.3mで検出した。整地土1・2には、いずれも古代~中世の瓦や基壇外装材とみられる凝灰岩片が混入していることから、整地は中世以降の所産と考えられるが、それは叡尊が住した時期にともなう可能性もある。なお、遺構検出面は、整地土1・2両方で認められ、計2面が存在する。地山は、Y-17.855ライン付近以東とY-17.847ライン付近以西で0.4mほど落ち込んでおり、この落ち込み部分を埋

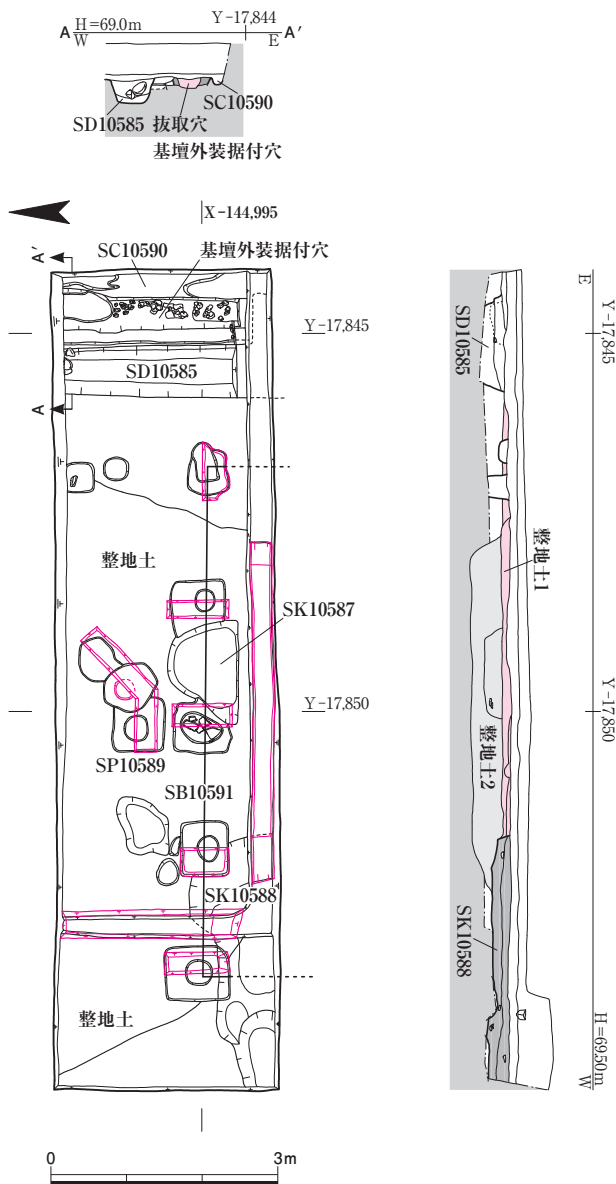


図258 第525次調査区遺構図・土層図・断面図 1:100

め立てるのが整地土2である。さらに地山と整地土2を覆うように整地土1が展開する。なお、落ち込み部の地山は、標高68.9m付近で確認した。

4 検出遺構

整地前の遺構

西回廊SC10590 整地前の遺構として、調査区西側の地山上面で、海龍王寺西回廊にともなうと考えられる凝灰岩製基壇外装ならびに雨落溝の残欠を検出した。残存状態が悪いため正確な規模と構造は不明だが、地覆石らしき石材の残欠は認められないことから、基壇外装は地覆石をもたず、羽目石を直接据え付けたようである。凝灰岩の残存状況からすると、羽目石は幅40~50cm前後、奥行20cm前後と推定できる。回廊の基壇土は、削平によって残存しておらず、羽目石も上部を欠失し、底部付近をわずかに残すのみである。基壇外装の据付穴は、布掘状を呈し、幅約40cm、基壇側に外装材を寄せて据え付



図259 西回廊SC10590基壇外装残欠(奥に西金堂、北西から)

けており、羽目石の背面にある据付穴の埋土は、厚さが1~3cm程度とうすい。調査区北端の羽目石は残存せず、抜取穴が検出されたため、当該部分は石材がすべて抜き取られたと考えられる。

西回廊の雨落溝は、後世に掘削された南北溝SD10585によって大半が失われているが、東の溝肩部で玉石敷を抜き取った痕跡が確認できたこと、南北溝に径20cm前後の円礫が数点確認できたことなどから、乱石組だった可能性が高い。なお、基壇外装の外端から雨落溝の抜取穴までは30cmほど離れており、この間に幅狭の犬走りが存在していた可能性もある。

整地後の遺構

整地土2から掘り込まれた中世以降の遺構は、掘立柱建物1棟、柱穴2基、土坑2基、ピット5基を検出した。

掘立柱建物SB10591 Y-17.846ライン以西で検出した東西4間の東西棟建物であり、調査区の南側まで展開すると考えられる。柱掘方は方形で、一辺0.6~0.8m、深さ0.25m。柱掘方ならびに柱抜取穴双方に瓦片が混じる。

土坑SK10587 東西1.3m、南北0.95m以上、深さ0.3mの不整形を呈し、軒瓦をはじめとした瓦片が大量に出土した。

土坑SK10588 東西3.4m以上、南北1.2m以上、深さ0.3mの不整形を呈し、こちらでも瓦片が大量に出土した。SK10577・10588とも、瓦などを投棄したゴミ穴であった可能性が高い。

表34 第525次調査出土瓦磚類一覧

軒丸瓦		軒平瓦		軒棧瓦	
型式	種 点数	型式	種 点数	種類	点数
6140	A 1	6702	G 3	近代	3
6282	D 3	6721	Db? 1	隅切	1
巴 (中世)	4		E 2		
巴 (近代)	1	6734	A 1	軒棧瓦計	4
古代	5	重弧文	2	その他	
時代不明	2	古代	2	丸瓦 (刻印)	4
		中世	1	平瓦 (刻印)	6
		近世	1	隅切平瓦	1
				鬼瓦 (近世)	1
				鬘斗瓦	2
				雁振	1
				隅木蓋?	2
				目板瓦?	1
				用途不明	3
軒丸瓦計	16	軒平瓦計	13	その他計	21
	丸瓦		平瓦		磚
重量	109.046kg	318.752kg	0.906kg	1.794kg	凝灰岩
点数	554	2468	2	24	

5 出土遺物

土器 本調査区での土器の出土量は少なく、土師器や須恵器などの土器片が1箱分にとどまる。(青木 敬)

瓦磚類 本調査区出土の瓦磚類は表34に示した。大半が近世以降だが、古代の瓦も一定量ある。特に、SK10587からは奈良時代の瓦がまとまって出土し、図260の軒瓦もすべてSK10587出土である。1は6282Dでやや小型の軒丸瓦。平城宮南西隅でまとまった出土例がある。2は6140A。6140Aは外縁が明確に残存する資料がなかったが、6140B同様、鋸歯文が疎にめぐることが判明した。平城宮・京内での出土例は少ないが、平城宮東方官衙等で若干の出土がある。3は6721Eで6721型式のなかではやや小ぶりの軒平瓦。平城宮東院地区で比較的多く出土する。4は6734A。直線顎の軒平瓦。平城宮・京全体での出土例は非常に少なく、平城京左京四条二坊十五坪(田村第推定地)のほか、西隆寺に同範がある。5は6702G。薬師寺所用瓦と同範。1～5のうち、1と3は奈良時代前半、それ以外は奈良時代後半である。いずれも海龍王寺旧境内では初例となる。これらは回廊SC10590に葺かれた可能性はあるものの、出土量が少なく軒瓦の組合せなどは不明である。また、本調査区からは顎部片だが7世紀後半の重弧文軒平瓦が2点出土した。そのうちの1点は、平瓦部に穴をあけ、粘土製の釘を打ち込んで平瓦部と顎部を留めている。同様の技法をもつ重弧文軒平瓦は左京八条三坊十五坪(姫寺廃寺)でも出土している。(石田由紀子)

6 まとめ

従前、西金堂と西面回廊との基壇間距離は10尺(3.0m)、回廊基壇は地覆石が存在せず、羽目石を直接地面に据え

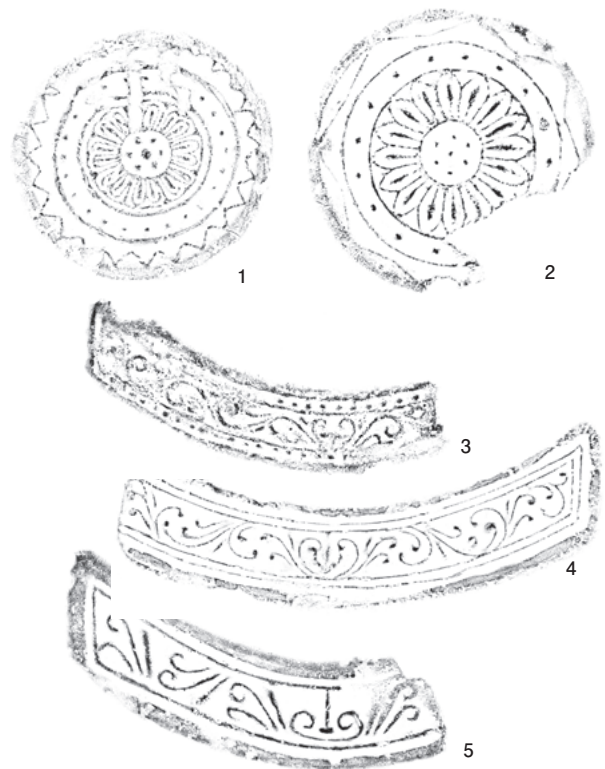


図260 第525次調査出土軒瓦 1 : 4

付けたと推定されている。羽目石を直接地面に設置する例は、今回確認した海龍王寺西回廊以外にも薬師寺食堂や十字廊などにも例があり、切石積基壇外装の簡略化形態として用いられたと推定できる。また回廊基壇幅は、僧房との位置関係から17尺、梁行は8尺との推定値が提示されている²⁾。梁行長からみて西回廊が単廊だったことは確実である。

今回、西面回廊基壇西端付近を検出したが、岡田がおこなった回廊推定ラインとはほぼ同じ位置で検出したことから、岡田の推定を追認することができた。したがって、回廊基壇内径は東西160尺、南北61尺とした回廊全体の規模も現状では妥当な数値と評価できる。さらに基壇構造も羽目石を直接地面に据え付けていたことを確認し、これも岡田の推定を追認する結果となった。

加えて、西回廊の雨落溝が乱石組であった可能性が高く、基壇端から30cm間隔をおいて位置することから、回廊の軒の出が5.5尺以上となることもあきらかとなった。このように狭小な面積の調査であったが、いくつかの注目すべき調査成果があがった。(青木)

註

- 1) 奈良県教育委員会事務局奈良県文化財保存事務所編『重要文化財海龍王寺西金堂・経蔵修理工事報告書』、1967。岡田英男「海龍王寺」『大和古寺大観』5、1978。
- 2) 岡田英男の記述によるが、岡田によるとこれらの数値は、宮本長二郎が導出したという。